

## 2024 年度第 2 回浜松市“やらまいか”総合戦略推進会議

1 日 時 2025 年 2 月 25 日（火）15：30～17：00

2 場 所 本館 5 階 庁議室

3 出席者 委員 12 名

（石川雅洋委員、秋元健一委員、笹原恵委員（オンライン）、小林淑恵委員（オンライン）、名倉秀樹委員、鈴木真由美委員、大橋泰介委員、寺本政司委員、伊藤充宏委員、山村隆浩委員、鎌田裕子委員（オンライン）及び浜松市長（座長））

事務局 3 名

（企画調整部長、企画課長、企画課長補佐）

4 報道関係者 2 名

5 概 要 以下のとおり

### 1 開会

（事務局による司会進行）

### 2 市長あいさつ

皆さまこんにちは。本日は、第 2 回浜松市“やらまいか”総合戦略推進会議に大変お忙しい中お集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

今回、今年度 2 回目の会議となるわけですが、昨年 11 月に開催をいたしました前回の会議の際には、浜松市における人口減少の主な要因ということで考えられます、少子化、東京圏への若年層の人口流出に注目をいたしまして、現在の状況をお示ししたところでございます。

前回の会議の際に皆さまからいただいたご意見を踏まえ、次期総合戦略（案）を作成いたしましたので、本日、お示ししたいと考えております。皆さまには意見をいただければと思っております。

ご承知のとおり、国でも地方創生 2.0 の「基本的な考え方」が示されまして、この夏頃には、今後 10 年間で集中的に取り組む基本構想を取りまとめるということで伺っております。われわれとしましても、そういった国の動きに呼応いたしまして、人口減少に歯止めをかけるということで、地方創生の取組を進めていきたいと考えているところでございます。

われわれ浜松市の次期総合戦略が充実した内容となりますように、委員の皆さまには各分野における専門的な知見から、活発なご議論をお願いしたいと思っております。本日のこの会議が今年度最後の会議となるわけですが、委員の皆さまにおかれましては、忌憚のないご意見をいただきますようお願いを申し上げ

げまして、開会にあたってのごあいさつとさせていただきます。本日は、どうぞ  
よろしくお願いいたします。

### 3 国の行動について

(事務局から資料に基づき説明)

◆資料1：地方創生2.0の「基本的な考え方」(概要版)

### 4 議事

(1) 浜松市地方創生総合戦略(案)について

(2) 意見交換

(座長による司会進行)

(事務局から資料に基づき説明)

◆資料2：浜松市地方創生総合戦略(案)

(石川委員)

石川です。よろしくお願いします。商工会議所で主に製造業を担当しています。  
資料を事前に見させていただいて、「しごと・ひと・まち」がありますが、自分  
からは「しごと」で2つ、「ひと」で1つ、「まち」で1つ、話をしたいと思いま  
す。

「しごと」ですが、本当に一番困っているのは人手不足だと思っています。特に  
保全であるとか、高技能な技術者は採用するのも難しいですし、辞めていって  
他の会社に入るとというのが現状です。特に今は人が少なく、浜松ですと、愛知の  
方にもかなり流れて行きます。

特に高校生の採用については、今までですと採用は企業が待っている側だったの  
ですが、今は採りに行かない限りは企業には来ないというか、愛知の方にどん  
どん流れて行くというのが現状で、これまでと同じ採用のやり方ではもう通用しな  
くなっています。

これは11月にも話したことになりますが、「しごと」です。1つは、企業と学校  
を結び付けということがいかに大事かということで、これを徹底的にやりたい  
なと思っています。

浜松商工会議所でも企業と人を結び付けようというのが2025年の重点になっ  
ています。特に工業高校でということをやっているのですが、実際には浜松商工  
会議所だけではなく、社団法人でもやってくれているところがあって、そこと手  
を組みながら、高校に行って企業を知ってもらう、もしくは高校生に企業へ来て  
もらって、会社を知ってもらうということをできるだけやろうと取り組んでいま

す。高校生クラスでは、親御さんにも企業を知ってもらおうということをやっています。

チラシを持って来たのですが、これは去年、実際に城北工業高校で、製造業、特に自動車産業のガイダンスを実施し、体育館でブースをつくって企業の紹介をやりました。こういうことをやっているのですが、なにせこれは社団法人がいくつか集まるということで、突然ある社団法人から依頼があつて、また別の社団法人からもあつて、逆にこっちの社団法人は探さなければならないということで四苦八苦しております。

これは浜松商工会議所にも話しているのですが、このチラシを作製した社団法人は冊子もつくっているんで、できれば浜松商工会議所とともに浜松市役所も、企業と高校、企業と学校にどう近づけるかということ、ぜひ一緒にやってみて行ってくれたらなということをおもっています。

社団法人を束ねるだけでも意味があると思っていて、企業側もいろいろな準備もできますし、いろいろなアプローチの仕方なんかも考えられると思うので、ぜひ企業と高校、工業高校、中学校でやってほしいなと思っています。

ただ、これは間違いなく製造業だけの話ではないと思っています。飲食業も農業、商業もそうだと思うので、こういう冊子を作るとか、あらゆる業界が高校に近づいて、どういう企業がある、どういう会社がある、どういう飲食業があるということを知ってもらって、高校生の人たちに選んでもらうということをぜひやりたいなと思います。

ほとんどの場合、企業を知らないというのが一番ネックになっていると思います。給料だけで愛知県の方に流れるとかというのが間違いなくあるのでということが1つです。

2つ目ですが、中野市長と私も去年の暮れにインドの方へ行きましたが、浜松市も静岡県もインドと一緒にやっているということで、外国人材の話は欠かせないと思っています。静岡大学も留学生を受け入れております。今回の出張でよくわかったのは、現地の大学や高校と企業がくつつくことができるようになりましたので、どんどん参加をしていきたいと思ひますし、特に浜松はスズキ系の仕入れ先もたくさんあるので、ぜひそういうところともくつつくことができたらと思っています。インド工科大学といった本当に優秀なところは、まず浜松商工会議所単独では動けないので、ぜひ浜松市なんかでも、インドに対して出ていってくれたらなということはおもっています。

そういうことを考えると、企業側も高校に会社を見てもらおうとか、インドの人、海外の人に見てもらおうとなると、企業側もしっかり準備して行って、環境もよくして働きやすい環境をつくっていくということをやらなければならないと思います。例えば市で認証制度をつくって、ぜひこの企業も見てくださいと言えるよ

うに企業もなっていけるといいと思うので、ガイドラインなども作りながら認証制度にすると、インドの方が来たとしても、いろいろなところを回れると思います。高校に企業のこういったところを紹介できるということを思っているので、ぜひ高校生、若者や外国の方というのは、間違いなく戦力になると思いますし、それが浜松のにぎわいになると思っています。

それから、「ひと」と「まち」について簡単にお話いたします。私はアクト通り周辺に住んでいますが、最近よく思うのは、高齢の方が朝散歩をしているとか、犬の散歩をしている人が本当に多いということです。世帯数が増えていて単独世帯が増えているというのは、たぶんそうじゃないかと思っているのですが、高齢の方がまちなかのマンションに住んで散歩するみたいなことがあるとするなら、若者、女性もそうなのですが、高齢の方が住みやすいまちづくりをするというのは、すごくいいことではないかと思っています。

例えば、散歩をするにはアクト通りは本当にいいですけど、これをもっと広げていけば鍛冶町の通りであるとか、それこそ松菱跡地に緑のものがあって、散歩しやすくする。そうすると必然的にお金も循環すると思うので、ぜひ「ひと」というと若者、女性も当然呼ぶのですが、高齢者が住みやすいまちをつくるというだろうなということを思っています。

最後に、まちづくりですが、この前、秋元委員が言われていた、まちなかの老舗の飲食店が閉店等している話もありますが、千歳のまち並みっていいなと思います。昭和レトロな感じがしていい雰囲気にも関わらず、本当にそこに人が寄っていないというのは間違いなくて、平日はがらがらです。

静岡市の人宿町人情通りというのがあって、昔のものでいい食材があれば間違いなく人は来ると思うので、千歳は人宿町の人情通りを参考にしてもいいと思います。そうすると、それをコーディネートしてまとめる人もいますし、そのまち全体をどうしていくのだという設計がいると思うので、できればそこはまちがリードしてもらって、誰かを呼んでそのまちをデザインしてもらうということから始めないとできないと思います。高齢のまちもそうだと思うので、積極的にそういう外部の人材を入れてはどうかと思います。

地方創生において、東京と地方を結び付けるとするのは一番いい話で、東京でいろいろ実績のある人を呼んでまち並みをつくってもらう。高齢者が住みやすいまち並みだとか、人情通りのようなまち並みは本当にいいと思うので、そうすると老舗であったとしても、料理がおいしければ絶対に生き残れると思うので、ぜひそういうまち並みをつくってほしいと思います。

私からは高校生と企業を結ぶということ、外国人材を雇う道筋をつくるということ、それから、「ひと」の話では高齢者のまち、最後の「まち」は人宿町がいい

と思っているので、ぜひそういったものを企画してもらえると、企業としてもいろいろ賛同ができることができると思っています。

（中野市長）

ありがとうございました。

「まち・ひと・しごと」、多岐にわたるご意見とアイデアをいただきまして、本当にありがとうございます。

（秋元委員）

浜松パワーフード学会の秋元でございます。地方創生ということで、地方が力を強めていくということと言うならば、今回の案は非常にまとまっていて、実現したらすごいなと思っております。

さらにこの地域としてもっと強くさせるための私からの提案なのですが、今回、基本的な考え方の中で、ここに示された7つの分野に分かれておりますが、ここにもう1つ増やしていただけたら、浜松らしいのかなと思ったのが、農業、それから水産業、いわゆる一次産業ですね。こういった所にもう少し力を入れて行くと、この後のすべてにつながってくるのかなと思います。

これは、ここに書かれている「産業経済」もそうですし、「こども・教育」もそうですし、「安全・安心・快適」、そして「くらし・環境」「健康・福祉」、これは浜松で育った生産品を、皆さまにお届けするということの方がより充実すれば、健康、まさに健康寿命も延伸すると思います。男女の健康寿命日本一を4期にわたって支えているのは、やはり浜松の一次産業をはじめとする「食」ではないかと思います。

皆さまもご存じのとおり昨年末より米がないということで、価格も上昇し、米を買えないという状況で、日本中が混乱しておりました。国も備蓄米を出すとか政策を検討してらっしゃるようですが、この地域の特性を考えると、特に農業にもっともっと力を入れて、浜松の食料自給率を上げるによって地方創生につながっていくのではないのでしょうか。自給率100パーセントを超えるのだというような大きな目標を掲げて、そこで働き口もつくっていける。「稼げる農業」を作り出していくのです。最近スマート農業ということで、若い頭のいい経営者たちが、トマトやブロッコリーやいろいろなものをつくり出しています。また、京丸園さんなど、社会貢献をしながら価値の高い生産品をつくって行って、企業としても成り立っているところもあります。

そこにもっと、例えばスタートアップも含め若い人たちが興味を持つような応援体制を整えて、若者の参入があるとよいと思います。魅力的な農業、水産業の表現の仕方を工夫し、浜松という地の利で、健康寿命の延伸を支えるところにみんなが寄与していかないかというような、新しい意義のある生き方、生きざまを、提案していくのです。AIとかコンピューターとか駆使できるハイスpek的な人

たちにも、ハードワークの合間に農業も営むなど、自身の健康も維持でき、自給率などの地域課題へも貢献できる新しいワークスタイルなど、土をいじりながら地域の健康を支えていくというような、そういった取組に興味を持つような若い人たち、こういった人たちを増やしていくということも、地方創生に非常に貢献してくるのではないかなと思います。

現在、試験的に中田島砂丘で桜島大根を作っていて、20キロぐらいの大根ができます。今年も出来上がって収穫をしだしているところなのですが、その周辺の今まで山林だったところがいつの間にかきれいになって農作物を作っていて、それがなんと日本人ではないのです。聞くとベトナム人やブラジル人で「君たちは農業をしに来たのかと聞くと「いや、企業で働きに来たけど、反りが合わなくて辞めた」ということでした。やることないから、農業を教えてもらいながらやりだしたそうです。その土地の持ち主たちは、ただで貸すということで、外国人の農業者が急に増え出しています。

確かに農業は、気候や天候に左右はされますが、外国の方がちょっと教わっただけでも生産できるのです。一生懸命さがあれば農作物は作れるのですね。農業を仕事として生きる、ここにも価値があるのだということをこの7つの分野に是非とも盛り込んでいただきたいです。そして、農業を始めるとなると農業機具などお金がかかるので、市だけでなく県とか国から未来の為の助成も含めて、一次産業チャンスありというようなことになれば、若い方々も都会の暮らしではできない優位性や独自性から新しい生き方の可能性や魅力を感じて就労者が増えるのではないのでしょうか。地方創生の柱として、農業、水産業を盛り込んでいただくということも、浜松にとって、とても有効なことなのではと思います。私からは以上でございます。

(中野市長)

ありがとうございます。

ただいまのご意見についてどうですか。

(事務局)

農業に関しましては、今現在は分野1の産業経済の中で、網羅的に実施をさせていただいているところでございますが、委員からいただきましたご意見を踏まえて、具体的な取組をしっかりと注力して進めていけるように部局と調整させていただければと思います。

(秋元委員)

ぜひ柱として置いていただきたいと思います。よろしくお願いします。

(笹原委員)

静岡大学笹原でございます。

今回、総合戦略（案）の基本的な考え方等に非常にバランスよく盛り込まれているなと思いました。ただ、一方でバランスがいいだけに、やや総花的な感じがいたしますので、やはり浜松らしさをどのように出していくのかということに、少し焦点を当てて考えてみました。

「しごと・ひと・まち」というふうに申しますが、浜松の産業、「しごと」については皆さまたくさんご意見がおありになると思いますので、私からは「ひと」と「まち」ということに着眼してお話しさせていただければと思います。

静岡大学自体もそうなのですが、静岡県、あるいは浜松は非常に地の利がよく、名古屋に近く、あるいは東京と関西にも近いということで、今回のデータにもあったように、若い人たちの流出が非常に進んでいて、それをどのように食い止めるのか、あるいは戻って来てもらうのかというのは、浜松市にとっても非常に重要だと思います。

その中で、ちょうどよい規模の都市であるというか、人間関係が非常に密接にあって、何か困ったときに助けてもらえるという、ソーシャル・キャピタルという概念がありますが、そのソーシャル・キャピタルをどうやって深めるのかというのが非常に重要ななと思っています。

コミュニティ再生といったときに、浜松は自治会の力が非常に強く、これは浜松まつりがあることに関係していると思います。ただ一方で、少子化が進み、子ども会が力を落としていると聞いていますので、やはり自治会や子ども会に少してこ入れし、コミュニティを強化することが必要になるかなと思っています。

生まれ育った浜松で、あるいは転勤でいらっしゃる方々も多いですが、周りの人たちに助けてもらいながら、仕事も家庭も子育てもできるというのが非常に重要だと思いますので、そういったところでまさにまちづくりというのを、人づくりというのと合わせて考えていくことが非常に重要ななと思います。

その第1としては、子育てをしやすいまちづくりが非常に重要で、これは今回の計画の中にきちんと盛り込まれていますが、私も最近チェックをしていて感心したのは、浜松市はこども誰でも通園制度というのを導入なさって、だいぶ多くの方々が使われているということで、非常によい試みだなと思っています。

一方で待機児童も多い学童保育ですね。小学校へ入ってからこどもたちを預けるわけですが、1つは小3の壁と言われますが、浜松市は委託化を進めるなどいろいろと努力をなさっています。しかし、学童についての壁は非常にまだ大きく、お隣の名古屋市を見ると、そういった学童にあたるトワイライトというのがありますが、トワイライトルームを設置するだけでなく、トワイライトスクールということで、こどもたちをわりと自由に、他のこどもたちと遊べるような場を設定しているようです。

私がアドバイザーを務めるはままつ女性カレッジでは、特に学童に関心を持って  
いる皆さまが今回、浜松市の学童保育と名古屋市のトワイライトについて調べて  
くださいます、こどもたちが昔と違って、家に帰って来てすぐに一緒に遊ぶと  
いう状況になりにくいわけですが、そういう友達同士の触れ合いを通して、子ど  
も会であるとか、コミュニティの強化を深めるというのは非常にいいのではない  
かと思います。

大都市ではできない、しかし浜松であるからこそできるという、そういう構想を  
つくり上げていくことによって、浜松市から出て行った皆さまも戻って来る。あ  
るいは、たまたま浜松市にいらした皆さまが転勤、その先には施設に浜松から通  
ってくださる形ができればいいなと思っています。

もう1点、私の専門がジェンダー論ですから、ジェンダーという角度から SDGs  
の達成のところを見ると、ジェンダー平等を達成しようという、ゴール5のまる  
が少ないなと感じます。22 ページのところで、「一人ひとりが自己実現できる」  
というところが関係しているのですが、それには例えば、多様な人材の活躍と  
か、あるいはこどもと家庭の支援という形で、必ずしも女性自身の活躍という  
ところにはつながりにくいので、特に若年層の女性の流出が高いということありま  
すので、もう少し若年層の女性に、この地域は男女の平等を目指しているのだよ  
と、アピールができればいいなと思っています。

市民意識としては、浜松市の市議会は、静岡県他の議会に比べて、非常に女性  
の参画率が高く、そういった意味では男女平等を実現という環境も整っている  
と思いますので、そういった形でのアピールをしていただければと思います。

長くなって恐縮ですが、最後に歴史・文化という、私はここのところも代表で出  
ているので、これもあっさり書かれていますけど、浜松市は非常に歴史を誇って  
いて、縄文の遺跡であるとか、あるいは戦国時代を巡って、交通の要衝であった  
という立地もありますので、郷土の歴史を知ることによって、地元への愛着、誇  
りというものを高められるような、そしてそういう郷土の文化を地域で、コミュ  
ニティで守っていこうという、そういうことがうまく盛り込まれるといいなと思  
います。

以上です。よろしくお願いいたします。

(中野市長)

ありがとうございます。

具体的な施策について、いろいろアイデアをいただきまして、うまく盛り込みを  
していきたいと思っております。ありがとうございます。

(小林委員)

静岡文芸大の小林でございます。

私からは資料１と資料２に関して、気づいたところを大きく２点お話ししたいと思います。まず資料１の地方創生２.０の「基本的な考え方」ということを拝見しております。冒頭、「好事例の普遍化は、なぜ進まなかったのか」とあります。１０年前からこういったことを実施していて、浜松市の場合には、この好事例というのはなんだったのか、そしてそれが定着しなかった、普遍化しなかった理由は何だったのだろう、ということが１つ疑問に感じました。

それからもう１つ、資料１と資料２を見たときに、国が思っているデジタル化、DX化という思いが、浜松市の今後の総合戦略の方針の中には、含まれてはいるのですが、それほど強くは反映されていないのかなと感じました。

１９ページのこども・教育に、教育データを活用したDX推進と記載があります。それから、２５ページの地方自治のところにもデジタル化ということが述べられているわけですが、おそらく国の想定しているいわゆるデジタル化、DXはもっともっと広くデータを使ってほしい、オープンデータを使ってほしいということだと思います。産業経済の振興にもますます活用してもらいたいなと考えているのではないかと思います。

浜松市のホームページを見ましたら、オープンデータの活用事例というのがいくつか出ていたのですが、まだまだ数が少ないということと、本格的な活用をされていないというような印象がございましたので、あらゆる分野で公開されているデータを活用するということを、さらに推進するとよろしいのではないかなと思います。

私は学力調査（全国学力・学習状況調査）結果の公開のスキームを作るということに携わっていた経験があります。そのときに各自治体に個票データを貸し出すことができるのですが、ほとんど使われていないというのが実態だったのですね。大学の先生方に貸し出しすることは結構あったのですが、自治体からの申請はほとんどありませんでした。おそらく、それだけのデータを活用して、政策につなげていける人材がいないのだと思います。

それから、行政は非常に忙しいと思いますので、じっくりデータに向かい合う時間がなかなか取れる人がいない、取れるセクションがないのではないかなと思っております。これは非常にもったいないので、どんどん使っていくとよろしいのではないかなと思いました。

それからまた別の視点で、もう１つ感じたことを述べさせていただきます。資料２の１６ページ辺りを拝見していたときに感じたのですが、人生が今１００年ということで非常に長くなっております。先ごろ、日本人口学会からジェームズ・レイモンという高名な人口学者と社人研（社会保障人口問題研究所）の先生方が一緒になって書いた新しい本の書評依頼がありました。そのタイトルは

「Re-marriage（リマリッジ）」なのですね。再婚です。初婚に関してはいろいろ

な分析がこれまでもされてきたわけなのですが、寿命が長くなると離別、死別、する人が非常に多いので、再婚ということもこれから政策のターゲットに入ってくるのではないかと思います。

「Re-marriage」とか「Re-work（リワーク）」とか「Re-education（リエデュケーション）」というような、人生の「再」イベントがかなり大きな役割を占めてくるのではないかなと思っています。

例えば16ページを見てみますと、出会いから結婚、妊娠、出産ということに関しては、われわれの目がいつているわけですが、現在は、死別・離別する人も相当な数いるわけです。その人たちがリマリッジしてくれれば、単身世帯が減ります。2人とも高齢で子どもをつくるというのは無理かもしれませんが、1人で暮らすよりは安心できるのではないかなと思っています。1人で暮らすのは非常にリスクが高いのですが、誰かとパートナーシップを持ち、身近な存在がいれば、生活の安心につながるのではないかなと思いました。

あるいは、働き方に関しても、今は教員もそうですが、休職する人、小中高の先生方もメンタルを病んでお休みされる人が多い。一般企業でもそういった方がたくさんいらっしゃると思います。明らかな疾患で、例えばがんとか、そういったもので休職をしなければならないケースもありますが、メンタル疾患というのが非常に多くなっていると聞いています。それで休職をした人たちが帰ってくる場所があるということ。帰ってくる仕組みがあるということが、人材不足、労働力不足に一役買うのではないかなというぐらい、規模的に大きくなっていると聞いています。

いったん病気になったり、心を病んだりして労働市場から離れた人たちがもう1回帰って来るといような視点、1回結婚が終わった人がまた帰ってくるという視点、1回教育の場を離れた人たちがまたもう少し学びたい、博士号取りたいというふうに戻って来るといような視点、「Re〇〇」といような視点が、これから人生が長くなる中で、非常に必要になるのではないかなと感じました。

これは特に浜松に特化した話ではないですが、漠然とそんなことを感じたということで、私からお話をさせていただきました。

（中野市長）

ありがとうございました。

なかなか新しい視点と言いますか、そういった観点からご指摘をいただきました。これも可能な限り取り込んでいきたいと思っています。

（名倉委員）

静岡銀行の名倉でございます。私からは、資料を事前に読み込ませていただいた感想等、個人的な意見を含めてお話をさせていただきたいと思っています。

まずもって私もやはり人口減少を食い止めるためには、仕事、教育、まちの創生というのが重要だと思っています。その中でも行政の方々いろいろ考えていただいて、施策を打っていただいておりますが、これが全国的に平均化ですとか常識化する前に、スピード感を持って取り組むことによって、他の地域よりも認知が高まるとか、地域の方々の集まりというのが変わってくると思いますので、スピード感を持って取り組んでいただきたいということをお願いします。

われわれ静岡銀行も、地域に根差した金融機関を目指している中で、例えば仕事に関して言えば、ICT企業の誘致などもあると思うのですが、そういった企業の方々も来た地に仕事が無ければ、なかなか移動してこれないという側面があります。

われわれも地域企業の生産性向上ですとか人材不足の解消の中では、DX化というものを進めていかなければならないと思っています。そういったところで官民が連携して、そういったものにつながりを持って注力していくことで、こういった問題を解決していきたいと思っています。

教育に関しては、以前の会議の中でもインターナショナルスクール等の例も出ささせていただきましたが、この地域にない教育などを持って来ることによって、こどもの教育にお金をかけるということがあるものですから、そういったところにまた改めて注力していただきたいと思います。

最後に、まちの創生で個人の感想というか意見ですが、若年層のこの地域に住んでいる方々が、本当にどこに行きたいかというのが正直わかっていないということもあります。一方で公共交通機関で行ける範囲というのも限られております。先だって徳島の神山まると高専の関係者の方々とお話をする機会がありまして、お聞きした中では、神山まると高専は皆さまもご存じかと思いますが、わりと中山間部の奥の方にありまして、その生徒たちが中心市街地等に移動するときに、交通費の補助が8割ほど出るというような制度があります。浜松市で適用するかわかりませんが、若年層が地域で行きたいところに行ったときの交通費を補助する代わりに、行った生徒さんたちにSNSで発信してもらう、それで地域の魅力を発信してもらうような仕掛けなんかも打っていただけるとよいと思います。

若い人たちは残念ながら、いろいろなホームページを見て行き先を決めるというよりは、同世代が発信しているものを見て、地域の魅力を探しに行くという傾向がありますので、そういった施策も面白いのではないかと個人的には思います。

以上でございます。

(中野市長)

具体的な取り組みやアイデアなどもいただきまして、ありがとうございました。

(鈴木委員)

浜松いわた信用金庫の鈴木です。

資料を見させていただきまして、全体として幅広い部分にさまざまな施策を提言していて、担当部署の努力に敬意を表します。

資料2の2ページから14ページ最初ぐらいまでは、全26ページの報告書の半分を割いて現状分析をしていましたが、ポイントは若い女性なのかなと思いました。本文では、若者と女性と別々に記載されていましたが、若い女性の減少に歯止めがかかっていないことが最大の課題だと思います。

資料2の16ページ、①しごとの創生のところですが、重要性はそのとおりだと思います。その対策として、最初に新たな産業の創出支援や企業の技術の次世代への継承とありますが、若い女性はそれを当地でしたいと思って東京から戻ってくるのかなと思います。

次に、2行下のところに、若者、女性、高齢者、外国人と並列されていましたが、高齢者の就業率は近年十分に上昇しており、外国人も当時は他の地域と比べ十分すぎるほど多いと思いました。ここでも若い女性が戻りたいと思う魅力的な施策をしっかりとすることが重要かなと思いました。

②ひとの創生で、安心してこどもを産み育てるとあります。今日のお昼に4人ぐらいいた女性の若手職員、Uターン就職で当金庫に就職をしている女性たちと食事をしました。意外と「就職活動のときは、子育てのことまで考えてこの金庫に就職しなかった」と話していました。「こどもを産んで初めて親のありがたさを感じ、戻って来てよかったなと今思うのですよ」とお話ししていました。

どちらかと言うと、浜松に就職をして3年以上とか、1年ですと短くていけないですけど、「3年以上勤務したら奨学金をいくらか援助してくれるといったような、浜松に定着して良いようなプランがあったら、それが一番うれしい。」と口をそろえて言っていました。それてしまうかと思いますが、それなら東京とかの方に若い男性がたくさんいるから、こっちに戻って来るのは嫌じゃないかと言ったら、「いやいや、結婚はアプリですから、それは全然大丈夫。」と言われました。

浜松市がこういった魅力ある施策をつくってくれて、東京で開かれる就職説明会とかで、各企業の担当者がそれを熱弁でアピールしてくれれば、「なんか、戻ってもよかったのかなという気持ちにもなるかな。」みたいなことも言っていました。

自分事になりますが、娘がつくばみらい市というところに家を建てて住んでおります。こどもが7歳、6歳、3歳、そして1月末に4人目が生まれて、旦那さんはもう東京、越谷から絶対転勤はないと言ったのに、また1年沖縄に行って、しかもお産のときでも戻れないと言われて困っておりました。私もお産のときには

母親らしく、入院しているときには3人のこどものお世話に行きましたが、その後は何も言ってきません。つくばみらい市は、上の小学生のこどもも1学年7クラスもあって、とても活気に満ちています。「最近どう？」と久しぶりに電話をしたら、ずっと39度か40度ぐらいの熱が出ていて、乳腺炎にかかっていたと言いました。どうしてそのときに言ってくれなかったのかと言ったら、「いやいや家に看護師さんも来てくれるし、この地域はワンオペでも全然大丈夫だから、電話しなかった。」と言われてしまいました。旦那さんが30代前半まで結構転勤がある方で、1人目は浜松で産んで、2人目は横浜で産んで、3人目は北海道で産んで、4人目をつくばみらい市で産みましたが、「断然つくば、最高にいいから5人産んでもいい。」と言ったので、やめるように言っておきましたが、そのぐらい環境が違うのかなと本当に感じました。

だからと言って、まち全体でこどもが急増しているこのような地域の施策を浜松に当てはめたときに、必ずしも当てはまるのかなとも思います。

本計画書には、冒頭申し上げましたように、幅広い分野にわたってさまざまな施策が記載されていますが、それが故にやや総花的な気もしました。そういった中で、3大都市圏を近隣に持たない浜松においては、普遍的なものではなく、独自のものにしていくというような施策をつくっていくことが重要だと思います。以上です。

(中野市長)

ありがとうございました。

冒頭、説明がありました国の地方創生2.0においても、若い女性にいかに選ばれるまちになるかというのが、1つのポイントだと思っております。われわれ浜松市としても、きちんと選ばれるまちになれるようにということで、取り組みを進めて行きたいと思っております。

(大橋委員)

浜松ホトニクス労働組合の大橋です。

私からも皆さまと同様にはなるのですが、浜松市の人口減少を食い止めるためにということで、総合的にさまざまな計画が練られており、大変素晴らしいものに仕上がっているなという印象を受けました。

そうした中で、私も特に問題として挙げるとしますと、鈴木真由美委員と同様ですが若い女性の転出超過というものが非常に顕著ということが問題だと考えております。この問題というのは、最初に石川委員がおっしゃっておられましたように雇用、採用の面で大変苦労しているといったところに直結するのではないかと考えています。自動車産業が多い浜松市ではありますが、自動車産業の場に女性を増やすということが非常に大事なのではないかと考えております。もちろん自

自動車産業ではない弊社は光産業ではありますが、光産業の方にも女性を増やしていただきたいと思っております。

その方法としましては、働きやすい環境をつくっていく、これが非常に大事なのかなと考えております。弊社でも現在働き方を改革するということで、休暇を取りやすくすることや、フレックス、リモートワークの導入を検討するなど、さまざまな施策をして女性の採用を増やしていこうということを計画しているところでもあります。

この働き方の改革を推進していくという活動をするにあたっては、女性の管理職が多くないとうまくいかないのではないかなと考えています。ただ、女性の管理職というのはやみくもに増やすのではなくて、管理職にふさわしい人材が育っていく環境をつくっていくということが、非常に大事なのではないかと考えております。そういった面では、小学校、中学校の教育のところからしっかりそういう人材を育てていく。そういった人への投資を中心にやっていただけますと、将来的には、結果的に浜松市に還元できる管理職が育って行くのではないかと考えております。

また、浜松市の女性の転出超過が続いている理由というのは、産業構造的に製造業が多いということが考えられると思います。製造業が多いということは、理系の採用が多いということのも大きな影響があると考えています。女性というのは文系の方に進学される方が多いというのは統計的に出ております。理系の学部にも興味を持っていただけるようにということで、小学校、中学校、高校の教育の中で、そういった女性にもしっかりと、ジェンダーに関係なく理系、文系、それぞれ興味を持てるような環境をつくっていただけるのが望ましいのではないかなと考えております。

それから、最後になりますが、女性の転出超過を防ぐためには、政治の面から女性が参画しやすいような環境を整えていただくというのも、非常に大事ではないかなと考えております。女性議員を増やす。それが一番大事なのではないかなと思います。

われわれ労働団体といたしましても、当然選挙になると推薦を行います。ただし、女性だからといってやみくもに推薦をするわけではなくて、推薦するにふさわしい方を推薦いたします。そういった面からも、女性にもっと政治の分野に感心を持っていただく、そういった取組もしていただけると、結果的にわれわれの労働団体から推薦する候補者ということも女性が増えて、結果的に市議会にも女性が増えていくのではないかなと考えております。

私の方で事前に調べさせていただいたのですが、女性参画の多い都道府県を調べたところ、東京都、神奈川県、滋賀県、徳島県が挙がってきました。東京都や神奈川県は、女性の人口が多いということで、参画が多いのも納得できるところで

はあるのですが、滋賀県、徳島県が地方であるということで、静岡県と似ていると思います。

滋賀県、徳島県の方が女性の管理職の比率が高く、地方議会における女性議員の割合が高いという傾向があると出ておりますので、2県の施策を参考にされてはどうかと思いました。以上です。

(中野市長)

ありがとうございます。

同じく女性に選ばれるまちということで、しっかり取組を進めていきたいと思っておりますし、またそれに向けての人づくりについても、しっかり取り組んでいきたいと思っています。

(寺本委員)

寺本です。よろしくお願いします。

私の前のお二方からご指摘があったのと、私も全く同感です。地方における人口減少の最大の問題は、若い女性が地方から出ていくことだと思います。この問題を解決しないと人口減少に歯止めがかからない気がします。

先日、日銀元理事の清水季子さんが浜松に講演に来たので、久しぶりにお会いさせて頂きました。彼女は名古屋支店長を務めていて、前任の名古屋本社編集局長時代にお付き合いさせて頂いた間柄です。今は女性エンジニアを支援するスタートアップの起業家として活躍し、エンジニアを求める企業と理科系出身の女性をマッチングさせる仕事をやっているそうです。

その中で聞いたのは、理科系の女子学生はせっかく身に付けた高度な専門知識が生かせるエンジニアではなく、金融や営業などまったく別の事務系に就職することが多いそうです。清水さん自身も東大工学部を出ていますが、エンジニアではなく、金融の道を選んだ理科系女子の1人です。

その理由を尋ねると、世の中の雰囲気、女性にはエンジニアはふさわしくないとか、体力的にきつい、とかいうイメージが蔓延していて、親や学校の先生も勧めたがらない、ということでした。はっきりした理由ではなく、何となく無理じゃないというそうした社会の偏見をなんとかなくしたい、と話していました。

先ほど石川委員もおっしゃっていましたが、製造業は人手不足でエンジニアも不足している。逆に言えば女性のエンジニアがもっと増えれば、人手不足は解消されるし、企業としたら大助かりだと思います。

浜松はモノづくりに秀でた民間企業が多く、アカデミズムの世界では理工系に強い静岡大学工学部があります。既に産学連携は進んでいると思いますが、もう一つ踏み込んで女性エンジニア育成という点で協力関係を深めていくのはいかがでしょうか。男性中心と思われがちなエンジニアの世界に女性が進出することは、新たなキャリア形成の場を提供することにつながります。職場を通してやりがい

や生きがい感じ、浜松で仕事と家庭の両立を考える女性が増えると思います。企業にとっても女性の感性を製品作りに生かすことができ、メリットは十分あるはず。理工系の人材を育て、必要とする浜松はまさに女性エンジニアを育成するのに恵まれた土地であるのは間違いありません。

先にお話しした清水さんの会社は今夏、名古屋市教育委員会とともに小中学生の児童らを対象に名古屋大学の理工系女子学生、実社会で活躍する女性エンジニアらと触れ合う体験学習を企画しているそうです。一種のキャリア教育ともいえませんが、子どもらが理工系のおもしろさや女性でも活躍できる世界だということ学ぶことは、将来の進路を決める上でも非常に重要だと思います。こうした積み重ねが社会の偏見を取り除き、女性が活躍する場を作り出していくと思います。浜松市でも行政がこうした戦略を立案し、後押ししてくれたらと期待します。

縦割りで各部署がバラバラになって進めるのではなく、各組織に横串を1本通してもらい、複合的に動く。そういう意味では推進する上での組織のあり方みたいなものもご配慮してもらった方がいいのではないかと思います。

最後になりますが、まちづくりや、文化的なまちということでお話がありました。しかし、店舗や通り、地域といった単体でのアピールではなく、街全体を貫くストーリーを持たないと、なかなか響かないのではないかと思います。浜松はどこから来て、どこへ向かうのか。「推し活」や「コト消費」などがもてはやされる昨今、やはり消費者はモノ自体ではなく、そこに潜む物語に興味を持っていると感じます。

私も浜松に赴任して半年以上経ちましたが、歴史で見れば徳川家康をはじめとする戦国ロマンがあり、サブカルの世界ではアニメの舞台になるなど物語のネタには困らない土地です。ただ、それを個別に論じるのではなく、過去から現在、そして未来へと続く1つのストーリーになれば、海外から訪れるインバウンド客にも十分アピールできると思います。そのストーリーがあれば、浜松市民も自分の街に自信を持ち、住み続けたいと思うのではないかと思います。ぜひ、官民力を合わせてこれからの浜松を象徴するストーリーを書き上げて頂きたいと思います。よろしくお願いします。

(中野市長)

ありがとうございます。

浜松で働くこと、暮らすこと、女性も当然そうですが、その魅力というものをしっかり発信して行くことは必要だと思っていますので、またそういった観点からも取組を進めたいと思います。

(伊藤委員)

静岡新聞社・静岡放送の伊藤でございます。すでにさまざまな鋭い意見が出ましたので、私からは取材人の立場から、浜松らしいまちづくりというのはどのようなまちづくりだろうというのを、話させていただきたいと思います。

今年はちょうど平成の大合併から 20 年を迎えます。2005 年 7 月に 12 の市町村が合併してこの浜松市が誕生いたしました。そのとき、私も浜松を取材地としていたのですが、浜松というものの魅力を発信するためには 7 つの行政区が必要だろうということで、議論があった結果、7 つの行政区が誕生したわけでございます。

しかし、その後 20 年経つうちに人口減少であるとか、行政運営の費用の増大などのさまざまなものがありまして、やはり 7 区ではなく 3 区に再編した方がいいだろうという結論に達したわけでございます。

その結果、どういうことが起きたかということ、政令指定都市の中でも極めて人口の多い中央区、そしてまた極めて人口の少ない天竜区という 2 つの区が同じ市の中に混在するということとなりました。一方で音楽をはじめ文化の中心である中央区、浜名湖の自然の魅力、汽水湖の恵みにあふれた浜名区、そして山、そして天竜川、山と川の魅力に、あるいは木材の魅力に恵まれた天竜区という特色のある区が生まれたわけでございます。このため、浜松市といってもなかなか 1 つのことをいうには難しい特徴があるというのが浜松であると思うのです。人口割りで資本投入、あるいは事業投下していくと、どうしても中央区に傾いてしまうということが言われています。

ですからここは合併から 20 年たったという契機でございますので、もう 1 回この 20 年を見直していただいて、その魅力をどういうふうに発信するかということを考え直すときなのかなと思います。3 つの区がそれぞれの魅力を発信しながら、あるいは人口問題では、形は違うかもしれませんが、競いながら、あるいは連携をとりながら、この浜松市をどれだけ魅力あふれたまちにしていくのか、浜松市と一言でいうのではなく、さまざまな角度から、ある意味地政学的に見つめていくのも必要なのかなと思っております。

(中野市長)

ありがとうございます。

今年は間違いなく 20 周年節目の年ですので、改めてそういった観点から発信をしていきたいと思っております。

(山村委員)

静岡県社会保険労務士会浜松支部の山村です。

人口減少を食い止め、若者・女性にとって魅力のあるまちにするということが非常に重要なのだろーと思っております。実は来月、私の大学時代の友人が 7、8 人、浜松に遊びに来るということで、どこに案内しようかということでいろいろ考えた

ときに、浜松って魅力あるまちだなというのを再認識しているところです。例えば、食で言いますと、うなぎは当然有名ですが、それ以外にもフグとかスッポンとかカニとか、そういうものもありまして、文化的にも時期的に祭りは5月ですが浜松まつりがあったり、観光資源としましては、うなぎパイファクトリーがあったり、航空自衛隊の浜松基地があったり、浜松城があったり、あと海でマリンスポーツができたりします。こういう立派な資源がいっぱいあるものですから、それをブラッシュアップし、今までの意見にもありましたが、発信を強化するというので、既にあるもので訴えることはできるのだろうなと思っています。

さらにそれに付加価値を付けるにはどうしたらいいかということなのですが、先ほどインターナショナルスクールということがありましたが、これは市議会だよりを見ましても、井田議員が既に誘致をしているということで、それは先週、浜松市の労働教育協議会でもそういうのは進んでいますという話だったので、それを進めていただきたいと思います。例えばインド系のインターナショナルスクールが来れば、英語や数学に強くなりますので、静岡大学工学部が浜松にあります、それは発展するような感じで、マサチューセッツ工科大学みたいな感じのものが、浜松工科大学みたいなものができると、浜松医科大学と並んで、教育面でも非常に付加価値が付くのではないかと考えます。そうすれば高度人材も育ちますし、日本人も当然そこに入れるようになるわけなので、それがまた新たな浜松の魅力につながって行くのではないかと思います。

あとこれは以前、妄想したことなのですが、今の松菱の跡地がもう20年以上空き地になっているというのは、正直恥ずかしいと思うものですから、例えば市役所を松菱跡地に移してしまっ、この跡地と浜松城公園を合わせて、ここに球場をつくって、あるいはドーム球場をつくって、例えば「出世ドーム」というような名前を付けて、なおかつできたらプロ野球チームを誘致できたらいいなと思っています。別に野球でなくてもよく、サッカー、バスケット、ラグビーなど浜松にフランチイズのチームがないのは非常に寂しいと思っておりますので、もし誘致できるなら、非常に浜松もよいまちになって、それこそ若者や女性が戻って来るようなまちになるのではないかというふうに思います。妄想が入っておりますが、私はそう感じております。以上です。

(中野市長)

夢のある意見をいただきました。ありがとうございます。

(鎌田委員)

聖隷福祉事業団の鎌田です。地方創生総合戦略を拝見いたしまして、「元気なまち・浜松」というところが、より浮き彫りになったなというふうに感じました。これが具体的に施策に落ちていったときに、やはりここに向かって行けることになっていくことが重要だと思って考えていました。

7つの分野それぞれありますけど、これはすべて関連付けされていくのだろうと思っています。7つの分野それぞれやったとしても、すべてに関連しているというふうに感じています。その中で安心して医療・福祉が受けられるまち、それから疾病予防、この辺の観点も出ていましたので、ぜひそのところにも注力したいと考えています。

ただ、その中でどこの分野においても人材不足が大きな課題になっているわけですが、紛れもなく医療・福祉においても起きています。厚労省が出している2050年には介護人材が20パーセント不足するだろうということを先駆けて、いろいろな取組をしているわけですが、特に専門職育成、学校連携といったことも、学校には入学者もいなくなる、定員割れしているというような状況もありますので、そこに向けて何をしていくかということも大事なかなというふうに思っています。

人材不足においては若い女性の方々へのご意見はたくさん出ていたので、私はちょっと違うことをお話しさせていただきます。外国人について、聖隷福祉事業団でも2009年から一定の受け入れをしたり、留学生の受け入れをしたり、そして特定技能の受け入れも拡大していく予定です。一方で受け入れた人は受け入れたまま、そのまま定着してくれるかということ、そうでもないで、その受け入れた方々をどう定着していくかということにも課題が残っていると思います。

そして、外国人の方の人権擁護、これらも置き去りにしてはならない課題だと思っていますので、そこに向けても落とすことなく取組に入れていく必要があるかなと思いました。外国人の採用、育成、定着、キャリア支援、このような観点からでも、少し取組が必要だと思っています。

聖隷福祉事業団でも困っている浜松の方々の法人に対し、そのような支援をスタートしていきたいと思っています。行政の方とも何か連携しながら、その取組ができるといいと思っていますし、そのことが高齢者、若い女性、外国人、若年層と、いろいろな観点からも人というものが定着、浜松に残るのではないかなと思います。

最後に、スポーツですが、部活動がなかなかできない状況になってきていますので、浜松アリーナの改修も予定されていると思うのですが、そういうところの集客だとか境遇だとか、そういったところの観点から元気になれる仕組みの1つになるというふうに期待をしています。

そして「する」「みる」「ささえる」でまちを元気にするということで、プロスポーツ支援ということで、浜松にはブレス浜松というバレーボールチームもありますが、まだSVリーグに参入できていないので、浜松を元気にする手段として、支援するという方法もあるかなというふうに、添えてお伝えしておきます。以上です。

(中野市長)

ありがとうございました。

浜松は間違いなく健康長寿日本一の地域でありますので、スポーツをはじめとして、いろいろな施策で健康寿命のさらなる延伸につなげていきたいと思います。

ありがとうございました。

(事務局)

ありがとうございました。

以上で、本日の内容は終了となります。今年度の第2期浜松市“やらまいか”総合戦略推進会議は終了となりますので、皆さまの任期も今年度末までとなっております。

委員の皆さまにおきましては、本有識者会議のご参画並びに多大なるご協力を賜り、ありがとうございます。あらためて市長から御礼を申し上げます。

市長、よろしくお願いします。

(中野市長)

改めまして、委員の皆様方には大変お忙しい中を、これまで毎回この会議にご参加をいただきまして、加えて大変熱心にご意見を賜りましたことを、改めて厚く感謝を申し上げる次第でございます。

人口減少は浜松市における最大の課題だと思っております。この人口減少局面からの脱却、転換、それによりまして、元気なまち浜松をつくるということで、これからも地方創生の取り組みをしっかりと進めて行きたいと思っております。それに当たりましては、われわれ行政としてもしっかり取り組みを進めますが、やはりオール浜松でこの難局に立ち向かって行くということが必要だと思っております。これからも皆さまそれぞれの立場から、ご指導またご支援をいただきますよう、引き続きご協力をお願い申し上げまして、御礼のごあいさつとさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

## 5 閉会

(事務局)

ありがとうございました。

本日は、長時間にわたりご参加いただきまして、ありがとうございました。本日の会議の議事録は文書にてご報告をさせていただきます。また、先ほど市長からもありましたとおり、本日のご意見を参考にいたしまして、3月末に総合戦略を決定する予定となっております。

それでは、これもちまして、2024年度第2回浜松市“やらまいか”総合戦略推進会議を閉会いたします。ありがとうございました。